

## 36 『扁鵲心書』の鍼灸について

北江龍也

『扁鵲心書』三卷（神方一卷を附す）は、南宋の紹興年間に開州（河南省濮陽縣）の巡検であった寶材が編纂した医方書である。寶材は河北真定（河北省正定縣）の人、武翼郎または太医の官に就き、紹興十六年（一一四六）に本書を編纂した。寶材は庸医であつたが、のち老医師に逢い内経の学に適つた医術の深奥を授けられ、以降名医として自ら扁鵲の学を継ぐ三代目と任じた。上巻は、経路と灸論を述べ、各論として黄帝、扁鵲、寶材の各灸法、その病證と配穴、灸の壮数を述べる。中巻は傷寒における様々な病證と雑病、下巻では雑病に加え婦人小児の病證について述べられている。末尾には『扁鵲心書神方』を附すが薬方なので今回は扱わない。

巻上に見られる治法は、黄帝扁鵲寶材の名を冠した三つの灸法である。病證数は〈黄帝灸法〉では二五条、〈寶

材灸法〉では四八条見られる。〈扁鵲灸法〉では九穴に病證が附され、他の灸法主治条文と記述法が異なる。また本書の大部分を占める巻中下に見られる病證は一二二条あり、それぞれに主治穴が附されており、それは多くとも三穴以内である。巻中下では、総穴数二五穴、それらの使用回数の一五九回中、関元穴が六一回使用されている。ついで命関（食竇）穴が二十回、左の命関穴（左は陽を表すことからより陽氣を強めるという発想であろう）が七回、合わせると二七回の使用である。二桁台の使用回数が認められるのは中腕穴の二十回までで、ほとんどの病證がこの三穴のどれかを主治穴として含んでいる。〈寶材灸法〉はこの結果と矛盾することなく、総穴数二十穴、使用回数七〇回中、関元穴が二九回、命関穴が十五回であるが、中腕穴は三回の使用に留まる。〈黄帝灸法〉では総穴数七穴、使用回数二七回中に関元穴が全く見えず、かわりに「臍下」という指示で十五回の使用を数える。次いで中腕穴は五回、命関穴は三回の使用である。では「臍下」とはどこかといえは巻中へ中風の条文に「若不灸臍下」という表現が見られ、ここで明記されてい

る主治穴は関元穴のみであることから、「臍下」とは関元穴のことと考えられる。以上から本書で最も多く使われる腧穴は関元穴で、ついで食竇穴である。食竇穴は命関という別名で見られることが多い。ほとんどの病證においてこの二穴を採用している。その理由として脾と腎の働きを重視することが挙げられる。〈要知緩急〉に「若先於臍下灸三百壯、固住脾胃之氣」、〈五等虚実〉に「須灸氣海、丹田、関元各三百壯、固其脾胃」、〈寶材灸法〉に「灸関元以救腎氣、灸命関以固脾氣」とあり、関元は腎を命関は脾を賦活する働きがあるとす。蓋脾胃為人身之根蒂」ということから、寶材は蔵府中でもとりわけ脾胃を重視している姿勢が窺われる。灸の壮数は五〜六百壯の指示が見え、下腹部の多壯灸が多く見られる。多壯の根拠として、〈大病宜灸〉に「故『銅人鍼灸図経』云、凡大病宜灸臍下五百壯。補接真氣、即此法也」といつている。逆に少壯のものは、「若去風邪四肢小疾、不過三五七壯而已」として区別している。

本書は灸法を主体とするが鍼法もわずかだが見られる。〈傷寒衄血〉に「鍼関元」、〈頭暈〉に「鍼風府穴」、

〈失血〉に「急鍼関元」その治法に「鍼関元穴」、〈頭痛〉に「刺風府穴」と計五回の使用が見られる。

本書には明代以降の作という偽書説があるが、その真偽は一時置くとして非常に独特な医学思想で一貫している。主に扶陽論つまり陽気の固持である。ために寒涼方を禁じ、補法が中心となる治法を好む。それは大病は多壯、小疾は少壯という持論から灸法は勢い多壯となる。しかし、その治法は薬方を別にすれば灸法を主体とした比較的単純なものであった。関元命関がほどの病證にも含まれ、その主眼は脾胃の保養、陽気の扶助である。

(日本鍼灸研究会)